

加納啓良著

『東大講義 東南アジア近現代史』

めこん 二〇二二・一〇刊
四六 二五九頁 二五〇〇円

中国の南、インド亜大陸の東に位置する東南アジアは現在、一
 の国から構成されるが、民族、宗教、言語、文化、風習などの
 面で多様性に富んでいる。そのため、従来の東南アジア史は国ご
 と、あるいは大陸部と島嶼部に分けて叙述するのが一般的であっ
 た。しかし本書は、この一見ばらばらに見える東南アジアをひと
 つの地域として捉え、最近一五〇年前後の「近現代史」として描
 く試みを行っている。著者が二〇一二年に東京大学を退職するま
 で行っていた東南アジア近現代史の講義ノートをまとめた概説書
 である。

「まえがき」の中で著者は、東南アジアがひとつの地域として
 捉えうる理由として、一九世紀後半までに全域が資本主義世界経
 済のシステムに編入され、地域間での分業関係が形作られたこと、
 さらに二〇世紀以降の植民地支配により国民国家を創造する政治
 的な動きが展開されたことで、多様な中にも「共通の脈動」をも
 って歴史が動いたことを挙げている。

まず第1章「東南アジアの概況と近現代史の時代区分」と第2
 章「近代以前の東南アジア史」で、環境や近代以前の歴史などが
 概説される。続く第3章「欧米植民地支配の拡大」と第4章「後

期植民地国家の形成と経済発展」では、一九世紀以降のオランダ
 とイギリスによる領域的な支配の拡大と、交通・通信革命により
 東南アジアが資本主義的世界市場に編入された過程が示される。

第5章「植民地支配の帰結とナシヨナリズムの台頭」、第6章「植
 民地支配の終わり」と国民国家の誕生」、第7章「ナシヨナリズム革
 命の終結と強権政治の展開」では、第二次世界大戦後に独立を達
 成し、新しい国民国家となった各国が、冷戦下で異なる体制を取
 りながらも、強力な指導者の下で強権的な統治が行われた過程を
 述べている。

最後の三つの章、第8章「製造工業の発展と緑の革命」、第9章
 「一九八〇年代からの東南アジア」、第10章「二〇世紀末以降の
 東南アジア」は、一九五〇年代後半からの経済的な発展と、アジ
 ア経済危機を経て強権政治から脱却し、地域統合の動きを加速し
 た二〇世紀末以降を記述している。

全体を通して、東南アジアで生じた社会的・政治的な大転換に
 共通する要因として、一八七〇〜一九一〇年代と一九七〇年代以
 降の二つの時期の交通・通信の革命的な発展と、植民地化や経済
 のグローバル化と相まって、国際分業システムに組み込まれた過
 程が論じられている。著者の専門が経済史であることから、貿易
 や投資の統計をふんだんに用い、それらの数値を俯瞰することで
 東南アジア全域の国際関係の変化を分析している点が、本書の特
 徴である。

一九六七年に結成された東南アジア諸国連合にはすでに一〇か
 国が集結し、残り一か国の東ティモールも数年内の加盟が確実視

されている。名実ともに経済共同体としての動きを加速させ、日本との関係も増している現在、ひとつの地域としての東南アジアの形成過程を鳥瞰する概説書といえよう。

(工藤裕子)